Fate5D's

天道

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ５Ｄ'ｓ

【Ｎコード】
Ｎ９６４７Ｘ

【作者名】
天道

【あらすじ】
遊星はゾーンとの戦いの後にアーククレイドルの崩壊に巻き込まれて異次元に飛ばされた。
そして、異世界の聖杯戦争のサーヴァント召喚の儀式を行った遠坂凛の声に応えて英霊として召喚され、凛と共に聖杯戦争に参加する。
遊星に待ち受ける新たな運命の戦い、魔術師同士の殺し合いに生き残れるのか！？

設定（※ネタバレあり）（前書き）

遊星の設定です。

若干ネタバレが含まれているので注意です。

設定（※ネタバレあり）

クラス：デュエリスト（決闘者）

マスター：遠坂凜

真名：不動遊星

性別：男性

属性：秩序・善

イメージカラー：赤

特技：ハッキング、プログラム作成

好きなもの：メカいじり、D・ホイール

嫌いなもの：仲間を傷つける者、クズ・ゴミ呼ばわり

天敵：無し

筋力：D

耐久：B

敏捷：C

魔力：Ｅ

幸運：Ａ＋＋＋

宝具：ＥＸ

ゾーンとの戦いの後にアーククレイドルの崩壊に巻き込まれて異次元に飛ばされた。

異世界の聖杯戦争のサーヴァント召喚の儀式を行った遠坂凛の声に応えて英雄として召喚され、強制的に凛のサーヴァントとなってしまう。

聖杯戦争で本来なら全サーヴァントの中で最弱の存在であるが、遊星は全てのサーヴァントと比べても劣らない強力な能力を持っている。

クラス別能力

対魔力：Ａ

神の化身『赤き竜』の加護によって遊星に対するＡ以下の魔術は全てキャンセル。

ただし、遊星が宝具で召喚した魔物には魔術が通用する。

単独行動：Ａ

遊星は死んではいないので、マスターからの魔力供給が無くても現界できる。

保有スキル

絆（カリスマ）：ＥＸ

遊星が大切にしている人と人の繋がり。
困難な状況、強敵との戦い、それらに対して遊星を中心とした仲間達の絆を一つにすることで、打ち破ることができる。
また、戦いにおける指揮、多くの人を引きつける統率、戦う者の力を高める士気の力が含まれており、最早ギルガメッシュの魔力・呪いを超えた究極のスキルとも言える。

赤き竜の加護：Ａ＋

神の化身、赤き竜の加護によって遊星に対するＡ以下の魔法はキャンセル。
闇の力または世界に干渉する力を、近くに居る人物と一緒に結界で完全に防ぐことができる。
また、遊星が望めば赤き竜の力の一部をその身に宿すことができる。

宝具

決闘盤（デュエルディスク）

ランク：？

絵札（カード）に込められた魔物を召喚、又は魔法・罠を発動する事ができる。
決闘盤に埋め込まれた１０個の宝玉に魔力を注ぎ込むことで立体映

像を現実に実体化する事が出来る。
魔物を破壊されると遊星の命（ライフポイント）にダメージを与えられ、ゼロになると命が尽きて死亡する。

デッキ
ランク：E～A＋＋＋
遊星の決闘者の魂とも言える絵札の束。
魔物、魔法、罠の力が込められており、それぞれの力の強さが異なる。
決闘盤にセットして使うことで真の力を発揮する。

戦法。
決闘盤の基本的な戦い方はスタンディング・デュエル、またはライディング・デュエルに乗っ取った戦い方である。
ただし、ライフポイントは８０００で、遊星の召喚した攻撃表示のモンスターが破壊されたときにその攻撃力分のダメージをライフポイントに与え、守備表示で破壊された場合はダメージが発生しない。
また、他の魔法や宝具の力によって、遊星やモンスターに何らかの影響を与えて、デュエルに干渉する場合がある。

.

第1話　運命の英霊召喚（前書き）

遂に投稿できました！

Ｆａｔｅ５Ｄ'ｓ！

第1話　運命の英霊召喚

ネオ童実野シティの未来をかけたゾーンとの戦いに勝利した遊星。

遊星はネオ童実野シティに落下する神の居城『アーク・クレイドル』のモーメントに自らのD・ホイールを衝突させるために向かった。

しかし、ゾーンが身代わりとなり、遊星をモーメントから離すために投げ飛ばした。

「あなたには未来がある。あなたは生きなければならない！」

「ゾーン！　ゾーン！！」

投げ飛ばされた遊星はゾーンの気持ちを無駄にしないために崩壊するアーク・クレイドルから脱出を試みる。

だが……。

「くっ！　うわぁあああああああああっ！！」

アーク・クレイドルの崩壊に巻き込まれ、遊星は異次元に飛ばされてしまう。

何もない無限に広がる異次元に飛ばされた遊星は動くこともできずにいた。

（俺は……このまま死ぬのか？）

その時。

――汝の身は我が下に。

（女の子の声……？）

突然、遊星の頭に高い声が響いた。

――我が命運は汝の剣に。

（誰の声なんだ……？）

すると、遊星とD・ホイールが白い光に包まれていく。

――聖杯の寄るべに従い。

（君が俺を呼んでいるのか……？）

――この意、この理に従うなら応えよ。

（わかった……応えよう……）

そして、遊星とD・ホイールは完全に光に包まれ、異次元から消えた。

そして、ネオ童実野シティとは異なる世界にある冬木市の洋館で黒髪の可愛らしい少女が魔法陣を作り出して呪文を唱えていた。

「抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――！」

ドォオオオオオン！！！

「居間の方！？」

少女は今居た部屋を飛び出し、階段を駆け下りて居間のドアを開けた。

「……はい？」

居間には壊れた家具の上に男が倒れていた。

「ちょ、ちょっと、大丈夫！？」

少女はその男――遊星に駆けよる。

「ねえ、あんた、私の『サーヴァント』でしょ？　起きなさいってば！」

少女は遊星の体を激しく揺らすが、遊星は起きない。

「もう……何なのよぉおおおおおーっ！！」

少女は頭を抱えて叫んだ。

翌朝、遊星は意識を取り戻して目を覚ました。

ベッドに横たわっており、そのままゆっくりと起き上がった。

「ここは……？」

「やっと起きたわね。まったく、世話が焼けるサーヴァントね」

朝食を持ってきた少女がため息顔に言う。

「君は誰だ？」

「私？　私は遠坂凛。あなたのマスターよ、サーヴァントさん」

「マスター？　サーヴァント？　一体何のことだ？」

遊星は首を傾げて頭にたくさんの疑問符を浮かべる。

「え……？　まさか、あなた……『聖杯戦争』を知らないの？」

「聖杯戦争……？　それは何の戦いなんだ？」

遊星の返答にガクッとうなだれる凛。

「まさか、サーヴァント相手に聖杯戦争の事を教えなきゃならないなんて……」

とりあえず、遊星はベッドから降りて凛の話を聞くことにする。

「いい？　あなたは聖杯戦争のために召喚された私のサーヴァントなの。ちなみに、サーヴァントって言うのは実在した英雄の魂なのよ」

「英雄の魂……？」

（そう言えば、ゾーンが言っていたな。未来で俺が英霊と呼ばれていたと……）

「聖杯戦争には七つのクラスがあるの。セイバー、ライダー、ランサー、バーサーカー、アーチャー、キャンサー、アサシンよ。そして、七つの英霊をこのクラスに振り分けて、私達七人のマスターに召喚されるの」

「七人のマスターに、七人のサーヴァント……」

「そして、マスター同士で争い、最後に生き残った者がどんな願いでも叶えられる聖杯を手に入れられるのよ」

聖杯戦争の大まかな説明を聞き、遊星は取りあえず理解したが、腑に落ちない点がある。

「君、幾つか聞いていいか？」

「ええ、良いわよ」

「今の説明でサーヴァントは英雄の魂、つまり……死んだ人間の魂がマスターに召喚されるんだな？」

「そうよ。それがどうしたの？」

「俺はまだ死んでいないのだが……」

「は？　死んでいない？　サーヴァントなのに？」

「実は……」

遊星は凛に召喚されるまでの経緯を話した。

「えーと、つまり……あなたの世界の人類が破滅した未来の世界の生き残りである一人の未来人が、未来を救うために破滅の元凶であるあなたの住む街を消滅させようとしました。それで、あなたは街を救うためにその未来人と戦って勝利。そして、街を消滅させる未来人が出現させた巨大な城の崩壊に巻き込まれて異次元に飛ばされた……って、一体それはどこのＳＦ映画よぉ！？！？」

遊星の話を聞いた凛は叫びながらツッコミを入れる。

「全て偽りのない事実だが？」

「そんでもって、英霊召喚の儀をやっていた私の声に応えて異次元からサーヴァントとして召喚されちゃった……何で応えちゃったのよ、このバカァ！！　まだクラスのあるサーヴァントの方が何倍もマシよぉ！！」

凛は涙目になってポカポカと遊星の胸を叩く。

「そんな事を言われても……」

「もう絶望的よ……これじゃあ聖杯戦争に勝ち抜くことが出来ないわよ……」

凛はその場に座り込んで酷く落ち込んだ。

遊星は腰を下ろして落ち込む凛に話しかける。

「聖杯戦争がどんな戦いかはわからないが、君が勝ち抜く以前に、他の魔術師に命を狙われているんだな？」

「そうよ……死ぬ気は更々無いけど、かなり危ないわよ」

「わかった。それなら、俺は君を守る」

「え？」

「サーヴァントとしてこの世界に召喚されたのなら、俺の力が君に何らかの役に立つはずだ。だから、君を命をかけても守る」

真剣な眼差しで言う遊星に凛の顔は真っ赤に染まる。

「い、良い心掛けね！　じゃあ、私を必ず守るのよ？」

「ああ、約束する」

「ところで……その『君』ってのを止めてくれない？　ちゃんと名前で呼んでくれなきゃ嫌よ」

凛にそう言われ、遊星は一つ頷いく。

「わかった、凛」

「それから、聞くのが遅いけどあなたの名前は？」

「俺の名前は不動遊星。遊星と呼んでくれ」

「わかったわ。よろしくね、遊星」

「こちらこそ、凛」

遊星と凛は握手を交わし、新たな絆を結んだ。

マスターの凛と、サーヴァントの遊星。

このタッグが第五次聖杯戦争に大きな影響を与えることになるのだった。

.

第1話　運命の英霊召喚（後書き）

遊星は異次元から召喚されたので、聖杯から聖杯戦争の説明を聞けなかったことにしました。

次回はランサーとのバトルです！

第2話　真紅の魔槍と進化の力（前書き）

第2話はＶＳランサーです！

遊星がランサーのゲイ・ボルグをどう防ぐかお楽しみに！

第2話　真紅の魔槍と進化の力

異世界同士の人間である遊星と凜は聖杯戦争を勝ち抜くために新しい絆を生んだ。

「さてと……それじゃあ、遊星。学校に行くわよ」

「……ああ、そうか。凜は学生か」

一拍遅れて遊星は頷いた。

「何よ、その反応？」

「すまない、俺は学校に行ったことがなかったからな」

「……あんた、今までどんな生活を送ってきたのよ？」

後でじっくりと遊星の話を聞こうと思った凜だった。

二人は玄関に出ると、遊星はD・ホイールの存在を思い出した。

「ところで、凜。俺のD・ホイールはどこにある？」

「D・ホイール？　もしかして、これのこと？」

凜はポケットから小さな宝石のついたネックレスを出す。

「あんたが召喚された時に手に持っていたものよ」

「これが……？」

凜に手渡され、遊星が手に持つと宝石が一瞬だけ赤く光り、遊星と凜の前にD・ホイールが現れる。

「な、何よ、これ！？」

「これがD・ホイールだ」

「もしかしたら、これが遊星の『宝具』かもしれないわね」

「宝具？」

「簡単に言えば、英霊の象徴するそれぞれの武器よ」

「なるほどな。確かにこのD・ホイールは俺の象徴みたいなものだからな……ん？　何だ、これは？」

遊星はD・ホイールに変なところを見つけ、デュエルディスクを分離させる。

「どうしてデュエルディスクに石が埋め込まれているんだ？」

デュエルディスクのライフポイントを現す部分の周りに１０個の小さな石が埋め込まれていた。

「……もしかしたら」

その石を見た凜はそっとデュエルディスクに手を置いた。

「凜？」

「黙っていて」

すると、凜の手から淡い光が溢れ、１０個の石にその光が吸収される。

「よし、これでオッケーね」

凜はデュエルディスクから手を離す。

「何をしたんだ？」

「魔力を補充してあげたのよ」

「魔力を補充？」

「それは魔力を吸収する石よ。どうやらその宝具は吸収した魔力を使ってその力を発揮するタイプね」

「そうなのか……」

「まあ、その宝具がどんな力なのかは後で見せてもらうとして、私は早く学校に行かなきゃね」

「凜。良かったらＤ・ホイールで送ろうか？」

遊星はＤ・ホイールからヘルメットを二つ用意する。

「あら？　それは素敵ね。よろしく頼むわ」

「ああ」

遊星は凜にヘルメットを被せ、D・ホイールのエンジンをかける。

小気味の良い何時も通りのエンジン音が鳴り、遊星は満足そうに頷く。

遊星もヘルメットを被ってD・ホイールに乗り、凜を後ろに乗せる。

「それじゃあ、道案内するから安全運転で頼むわよ」

「ああ。任せてくれ」

遊星はアクセルを踏み、D・ホイールを走らせる。

数分後には凜が通う『穂群原学園』まで到着し、学園の近くで凜を下ろす。

「じゃあ、遊星。あなたは学園の周りで適当に待機していて。何かあったらすぐに呼ぶから」

「わかった」

一旦遊星と凜は別れ、凜は学園に向かう。

学園の校門に足を踏み入れた瞬間、違和感を感じた。

（これは……結界！？　学園に展開されているわね……さっそくどこかの魔術師かサーヴァントが仕掛けてきたわね）

凜は平常心を保ちながら校舎に向かい、そのまま授業を受ける。

授業を受けている時、凜はふと遊星の事を考える。

（そう言えば、遊星って何の英雄なのかしら？　少なくとも私達と同じ時代の人間っぽいけど……まぁ、後で聞けばいいわね）

凜は頭を軽く振って授業を受ける。

放課後。

夕暮れ時、ほとんどの生徒は学園から下校し、凜は遊星と合流して屋上の結界の痕跡を調査する。

「取りあえず、この結界を何とかしなくちゃね」
凜が結界に手を加えようとした。
「何だ？　結界を消しちまうのか？　もったいねえな」
遊星と凜が振り返ると、フェンスの上に青い装束に赤い槍を持った男が立っていた。
「槍……まさか、ランサー！？」
「なるほど、槍使いのサーヴァントか」
遊星は宝石からデュエルディスクを呼び出す。
「怪しい気配を感じたと思って来て見たら、とんだ拾い物をしたな！」
「凜、離れていろ！」
「逃がすかぁ！！」
ランサーは凜を真っ先に狙い、赤い槍を振り下ろす。
「凜！！！」
その時、デュエルディスクにセットされた遊星のデッキが光る。
（これは、まさか！）

遊星はデッキからカードを六枚ドローする。

（やるしかない！）

「『スピード・ウォリアー』を召喚！！」

カードを一枚、デュエルディスクに置くと凜の目の前に特殊なアーマーとローラースケートを身に着けた戦士、遊星のデッキの切り込み役のスピード・ウォリアーが現れる。

「えっ！？」

「な、何だぁ！？」

「スピード・ウォリアーで攻撃！　ソニック・エッジ！！」

ローラースケートで走った後に高く飛んで、開脚蹴りをランサーに喰らわす。

「ぐあっ！？」

スピード・ウォリアーの攻撃を喰らったランサーはフェンスに激突する。

「大丈夫か、凜！」

「ええ、大丈夫よ。それよりも……」

凜は自分を助けたスピード・ウォリアーに驚いている。

「どうやら凜が魔力を補充してくれたお陰でカードの力を実体化することが出来るようになったらしい」

「カードの力を実体化？」

「ああ。これなら他のサーヴァントと対等に渡り合えるかもしれない。俺はカードを一枚伏せる！」

遊星は魔法・罠ゾーンにカードを一枚伏せる。

フェンスに蹴り飛ばされたランサーは起き上がり、槍を構え直す。

「やるじゃねえか！　魔物を召喚するなんてな。てめえのクラスを聞かせてもらおうか！」

ランサーは遊星を認めてクラスを聞いた。

「俺のクラス？　すまないが、それは知らない」

「はぁ！？　クラスが分からないサーヴァントなんているか！！」

「本当に知らないんだ。ただ、強いて言うなら……」

遊星はデュエルディスクを自分の腕の前に持って行きながら構え、威風堂々とした態度で言う。

「俺は決闘者。デュエリストだ！！」

「決闘者、デュエリスト……なかなか面白い奴だな。気に入ったぜ

！　それなら、俺様の本気で貴様を討つ！！」

ランサーの殺気が一気に膨れ上がる。

（何か……来る！）

遊星はデュエルディスクをぐっと前に構え直す。

ランサーの持つ槍に魔力と殺気が収束される。

（まさか、あの槍は！？）

凜は驚愕し、叫んだ。

「遊星、避けなさい！」

「その心臓、貰い受ける――！」

ランサーは力を溜めた槍を右手に持ち、投げるために後ろへ構える。

「ゲイ――」

そして、ランサーは全力で槍を遊星に向かって投げる。

「ボルグ！！！」

ランサーから放たれたのは、宝具『ゲイ・ボルグ（刺し穿つ死棘の槍）』。

それは、因果逆転の呪いによって、確実に相手の心臓を命中させる

真紅の魔槍である。

遊星の心臓を狙う真紅の魔槍。

だが、遊星はそれよりも早くデュエルディスクのスイッチを押していた。

「罠発動！　『くず鉄のかかし』！！」

伏せていたカードがオープンし、中からくず鉄で作られた案山子（かかし）が現れる。

ガキィン！！

夜の学校に金属がぶつかり合うような音が広がる。

「「なっ！？」」

ランサーだけでなく、凛も目を疑って驚いた。

狙った相手の心臓を穿つゲイ・ボルグがくず鉄のかかしによって防がれている。

そして、くず鉄のかかしに防がれたゲイ・ボルグはランサーの手に戻る。

「ば、馬鹿な……俺様必殺のゲイ・ボルグがあんな案山子に……」

「罠カード、くず鉄のかかしは相手の攻撃を一度だけ無効に出来る」

「無効だと？　因果をねじ曲げる呪いを無効にしたと言うのか！？」
「まあ、そんな所だな。そして、このカードは再びセットされる」
くず鉄のかかしのカードが閉じて伏せられる。
「さて、次は俺の番だ。俺のターン！！」
デッキトップから引いたカードを見て遊星はニッと笑みを浮かべる。
「行くぜ……俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！」
スピード・ウォリアーの隣に召喚されたのは、遊星が最も愛用しているチューナーモンスター。
「行くぞ！　レベル2のスピード・ウォリアーにレベル3のジャンク・シンクロンをチューニング！！」
ジャンク・シンクロンは右腰のレバーを引き、背中のエンジンを動かす。
ジャンク・シンクロンは三つの星から輪となり、スピード・ウォリアーがその輪に飛び込む。
「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！」
スピード・ウォリアーが二つの星となり、光の柱が現れる。
「シンクロ召喚！　出でよ、『ジャンク・ウォリアー』！！」

光の中から現れたのは、藍色を基調として屑鉄から生まれた戦士。
遊星と共に数多の強敵と戦い続けたエースモンスターである。
「シ、シンクロ召喚……？」
「な、何なんだその魔物は！？」
「シンクロ召喚は俺達の進化と絆の証だ！　ジャンク・ウォリアーでランサーに攻撃！！」
背中のブーストを放出し、突撃しながらナックルダスターを装備した巨大な拳で攻撃する。
「スクラップ・フィスト！！」
拳に更に巨大なオーラを纏い、ランサーはゲイ・ボルグの柄で防ごうとするが、そんな物は全く通用せずにジャンク・ウォリアーに殴られ、床に叩きつけられる。
「がはっ！？」
巨大な拳で殴られ、床に叩きつけられたランサーは相当なダメージを受ける。
「凄い……」
呆然と見ていた凛は口を開いてそう呟いた。
ランサーのゲイ・ボルグを完全に防ぎ、強大な力を持ったモンスタ

ーを召喚してランサーを圧倒する遊星。

（私、セイバーと契約をしたかったけど……異世界の英雄の遊星と契約できた私ってもしかして、マスターの中で一番超ラッキーだったりする！？）

凜は遊星の強さに期待や興奮で心が弾んだのだった。

第2話　真紅の魔槍と進化の力（後書き）

くず鉄のかかし、万能過ぎてごめんなさい。

こうでもしないと防げないと思いまして……。

不快感を与えてしまったらすいません。

次回は士郎＆セイバーとの出会いです。

第3話　女騎士との出会い（前書き）

さくさくと書けたので、ＩＳより先に投稿しました。

今回は士郎＆セイバーの登場です。

第3話　女騎士との出会い

ジャンク・ウォリアーの一撃をランサーに叩き込んだ遊星。

ランサーはむくっと起き上がり、体中の関節を鳴らすと大きく息を吸って全てを吐き出すように大笑いした。

「ふはははははっ！　本当に面白い奴だな、お前は！　こんな奴と戦えるなんてな！」

「そうか。それなら、一気に決着をつけるか？」

遊星はデッキトップに指を置くが、ランサーは首を横に振った。

「いいや。今ここで決着は着けねえ。こっちには色々あるんでな……今日はここまでにしといておくぜ！！」

ランサーは屋上から飛び降りる。

「遊星！　逃がさないで！」

「わかっている、ジャンク・ウォリアー！！」

ジャンク・ウォリアーは遊星と凜を肩に乗せて、屋上から降りる。

すると、ランサーは校舎の方を見ると何故か舌打ちをしてそのまま校舎に入っていった。

遊星は校舎に入る前にジャンク・ウォリアーを消し、凜と一緒に校

舎に入ってランサーを追いかける。

ランサーを追いかけている途中、校舎の中で少年が血を流して倒れていた。

「凜！」

「どうやらランサーを見てしまったようね。だから口封じの為に殺そうとした……」

「助かるのか？」

「私は魔術師よ。任せて、何とか助けるから遊星はランサーを追ってマスターを見つけて」

「任せろ」

遊星は頷き、走って再びランサーを追った。

それから遊星はランサーを再び追ったが、完全に見失ってしまった。
仕方ないので、校舎に戻るが、そこに凜と少年の姿はなかった。
遊星は凜は先に家に帰ったと判断して、遊星はD・ホイールを呼び出して凜の家に直行する。
「あ、お帰りなさい。ランサーはどうだった？」
家に戻ると、凜が出迎える。
「すまない、見失ってしまった」
「そう……まあ、仕方ないわね」
「こんな事だったらジャンク屋に行っておくんだった……」
「……は？　ジャンク屋？　そこで何すんのよ？」
何故ジャンク屋なのか、凜には理解不能だった。
「発信機を作って、ランサーの体に付ければ居場所を簡単に特定できたのに……」
遊星は拳を握りしめて本当に悔しがった。

「ちょっと待て、発信機を作る英雄なんて聞いたことないわ！！」
凜のツッコミは非常に正しかった。
少なくとも、発信機を作れる英雄は（おそらく）遊星だけである。
「他にも盗聴器とか部品があれば大抵の物は作れるが？　もともとあのD・ホイールは俺が造った物を元に、仲間や知り合いの企業と協力して完成させたからな」
「あんたは本当に何の英雄なの！？！？　それから、どうしてあんたはそんなに機械とか得意なのよ！！」
現代人でありながら実は機械がとっても苦手な凜は、機械が得意な遊星に頭を抱えて嘆いた。
若干暴れている凜に遊星はあることを思い出す。
「そう言えば、凜。校舎で倒れていた男はどうした？」
「ああ、彼ならちゃんと魔術で傷を治して助けたわよ」
「そうか。それなら……ん？」
遊星は何か引っかかった。
「ランサーは確か、口封じにその男を殺そうとしたんだよな……？」
「そうよ」

「もしその男が生きていると知ったら……ランサーはまた殺しに行くんじゃないのか……？」

「……あ」

ガタッ！！

「行くわよ、遊星！　Ｄ・ホイールですぐに直行よ！」

「わかった！」

遊星と凜はＤ・ホイールに乗るとすぐに走らせた。

「彼の家なら知っているからまずはそこに行くわよ！」

「ああ！」

二人は命が狙われている少年の家まで急いだ。

凜の案内で遊星はかなり大きな屋敷に着いた。

「ここか！？」

「ええ、そうよ！」

「よし、突入だ！」

二人はＤ・ホイールから降り、遊星はデュエルディスクを左腕に装置する。

屋敷内に入ると、そこにはランサーと金髪に騎士の鎧を身に纏った少女がいた。

「凜、あれは！？」

「サーヴァント！？　しかもあれは……セイバー！？」

凜はセイバーの存在に驚愕する。

「ちっ！　デュエリストまで来やがったか！　そんじゃあな！」

ランサーは舌打ちをすると、塀を乗り越えて逃げていった。

すると、セイバーは遊星と凜を睨みつける。

「新たなマスターとサーヴァント……」

遊星は凜を庇うように前に立ち、デュエルディスクを構える。

「戦わなければならないか……仕方ない！　俺のターン！」

遊星はカードを五枚引いてさらに一枚ドローする。
セイバーは目を細めて相手の出方をみる。
「手札から『レベル・ウォリアー』を特殊召喚！」
「何！？」
体に星のマークが付いた戦士が現れ、セイバーは警戒心を高める。
「この時、レベル・ウォリアーのレベルは４となる。そして、『ジャンク・シンクロン』を召喚！」
（遊星はジャンク・ウォリアーで対抗するのかしら？）
ジャンク・シンクロンが現れ、凛は再びジャンク・ウォリアーを出すのかと思った。
（彼女の姿からして剣士だ。それなら！）
「レベル４のレベル・ウォリアーにレベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！」
ジャンク・シンクロンは腰のレバーを引いて三つの星から輪となり、レベル・ウォリアーが中に入る。
「集いし刃が聖なる七つの剣となる。光さす道となれ！」
レベル・ウォリアーは四つの星となり、光の柱が現れる。

「シンクロ召喚！　光を切り裂け、『セブン・ソード・ウォリアー』！！」

光の柱から黄金の鎧を身に纏い、七つの剣を携えた戦士が現れる。

「えっ、うそ？！　ジャンク・ウォリアーじゃない！？」

「これは、七刀流の騎士！？」

凜は新たなシンクロモンスターに、セイバーは目の前に現れたセブン・ソード・ウォリアーに驚いた。

そして、セイバーは剣を持つ構えをする。

その手には何も持ってないように見えるが、手にはちゃんと剣が握られていた。

不可視の剣と呼ばれ、他人にはその姿が見えないのだ。

「行きますよ、七刀流の騎士！！」

「頼むぞ、セブン・ソード・ウォリアー！！」

セイバーとセブン・ソード・ウォリアーは剣を構えて同時に動いた。

「はぁあああああっ！！！」

「切り裂け、セブン・ソード・スラッシュ！！！」

二人の剣の刃が交差する時。

「止めろ、セイバー！！」

屋敷の奥から少年が出て来る。

「っ！？　マスター！？」

セイバーに焦りの表情が現れ、遊星はすぐさまデュエルディスクからセブン・ソード・ウォリアーのカードを外した。

すると、セブン・ソード・ウォリアーの姿が消え、セイバーは攻撃することなく止まることができた。

「何故ですか？　何故あなたは今の騎士を下がらせたのですか？」

セイバーは遊星の行動を理解できなかった。

遊星はカードをデッキに戻して口を開く。

「俺達はお前と戦いに来たんじゃない。ランサーに命を狙われていた彼を助けに来たんだ」

「マスターの……？」

「そうよ、セイバー。さて……こんばんは、衛宮君」

「と、遠坂！？」

「知り合いだったのか？」

「学校の同級生で顔を合わすぐらいよ。衛宮君、ここで話すのも何だから、中で話さない？」

「あ、ああ……」

少年――衛宮士郎は同様しながらも頷いて家に案内した。

中でお茶を飲みながら何も知らない士郎に凛は魔術師や聖杯戦争の事を説明する。

説明をある程度終わらせると、凛は立ち上がる。

「じゃあ、行くわよ」

「行くって、どこにさ？」

「教会よ。内容は後で話すわ」

夜の冬木市を四人の男女が歩く。

「なぁ、遠坂。今からどこに行くんだ？」

「この聖杯戦争の『監督役』に会いに行くのよ」

「監督役？」

「聖杯戦争を取り仕切っている奴よ。貴方がこれからどうするにせよ、会って損はないわ」

そう言って凜が案内したのは『言峰教会』。

「遊星、万が一の敵に備えてここに待機してくれる？」

「了解した」

「マスター、私もここで待機しています」

「ああ、わかった。行ってくるよ」

凜は士郎を連れて言峰教会に入り、遊星とセイバーは外で待機する。

お互いに何も言葉を発さない二人。

遊星はデュエルディスクからデッキを外してカードを確認する。

（聖杯戦争の為に少しデッキを調整しておくか……）

すると、セイバーは先に口を開いた。

「あの……失礼ですが、それがあなたの宝具ですか？」

「ああ。これでさっきみたいなモンスターを召喚するんだ」

「見たことない不思議な宝具ですね。あなたのクラスは何ですか？」
「俺にはクラスは無いんだ」
「クラスが無い？　それは本当ですか！？」
セイバーは驚く。
「ああ。だから、俺の事は遊星と呼んでくれ」
「それは……もしかしてあなたの真名ですか？」
「そうだ。俺の名前は不動遊星だ」
「よろしいのですか？　敵である私に真名を明かして？」
「何か問題があるのか？」
「……聖杯戦争において真名を明かすという事は弱点を教えるようなものですよ？」
「弱点ね……俺の場合は大して大差は無い。俺の宝具を理解できる人間は少なくともこの世界には居ないよ」
「この、世界……？」
「だから、俺の事は名前で呼んでくれるか？」
セイバーは初めて感じる遊星の不思議な性格、纏う空気に包まれそ

うになる。

「……はい、わかりました。ユウセイ」

「ああ、セイバー」

遊星は小さく笑みを浮かべ、凛と士郎が帰ってくるまでデッキを調整する。

.

第3話　女騎士との出会い（後書き）

ＩＳ小説は今日か明日には更新します。

次回は多分イリヤ＆バーサーカーとの出会い＆バトルになります。

最凶のサーヴァントに、遊星は最凶のシンクロモンスターで対抗しますのでお楽しみに。

第４話　狂戦士対狂戦士（前書き）

活動報告に励ましのコメントを書き込んでくれた皆さん、ありがとうございます。

これからも頑張って執筆していきます！

第４話　狂戦士対狂戦士

言峰教会で話を聞いた凛と士郎が戻ってくる。

「お待たせ、衛宮君にしっかりと聖杯戦争について教えておいたから」

「セイバー。頼りないマスターだけど、これからよろしく頼む」

「はい。こちらこそ、マスター」

士郎とセイバーは握手を交わす。

そして、士郎と凛は遊星とセイバーを連れて言峰教会を後にした。

しばらく歩いて突然凛が立ち止まり、振り返って士郎を見る。

「ここで別れましょう、衛宮君。わかってると思うけど、次に会うときは敵同士よ。言っておくけど、手加減なんてしないわよ！」

「ふふふ……」

指で士郎を指しながら忠告する凜に遊星は思わず小さな笑みがこぼれる。

「な、何よ！」

「いいや。俺のマスターは意外にお人好しだと思ってな」

「なっ！？　何を言ってんのよ、このバカ！！」

凜は顔を真っ赤にして遊星の腹を殴る。

「ぐはっ！？　いてて……乱暴なマスターだな」

腹を手でさすり、苦笑いを浮かべる。

「うるさい！　さっさと帰るわよ！！」

「はいはい」

凜は遊星を連れて帰ろうとしたとき、凜はピタッと止まる。

「どうした？」

遊星は凜の視線の先を見る。

視線の先には雪のように綺麗な銀髪をした小さな少女がおり、少女は小さく笑う。

「はじめまして、わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・ア

インツベルンと言えばわかるかしら？」

「何ですって！？」

少女――イリヤの名前のフルネームを聞いて凜は驚愕する。

「凜、あの子は何者なんだ？」

「『アインツベルン』……毎回、聖杯戦争にマスターを送り込んできてる奴らよ」

「えっ？　それじゃあ、あの子もマスターなのか？」

イリヤは士郎を見てにっこりと微笑む。

「そうだよ、お兄ちゃん。でも、わたしの一番の目的はね」

イリヤの瞳に雪のような冷たさが映る。

「お兄ちゃんを殺すこと」

とても小さな少女とは思えない殺意と冷たさが籠もった台詞に遊星達一同は一瞬背筋に寒気が走った。

「わたしね、この日が来るのをず～っと待っていたんだよ。お兄ちゃんを殺すこの日を！　おいで、『バーサーカー』！！」

イリヤの声に応え、地面が大きく揺れる音が鳴る。

イリヤの後ろに現れたのは鉛色の肉体をした巨人だった。

鋼の如き強靱な肉体、敵を威圧する鋭き瞳。
恐ろしすぎる威圧に凜と士郎は金縛りにあったかのように動けなくなる。
「しっかりしろ！　凜、士郎！！」
動けなくなっている凜と士郎に遊星の渇の一声が入り、凜と士郎はようやく動けるようになる。
「わ、わかっているわよ！」
「サ、サンキュー、遊星！」
遊星は頷くと、イリヤの方を見る。
「イリヤスフィール」
「イリヤで良いよ。ところで、あなたのクラスはなーに？」
「俺はデュエリストの不動遊星だ」
「デュエ、リスト……？　言いにくいからユウセイって呼ぶね。それで、何か用？」
「君はどうして士郎を狙う？」
遊星の問いにイリヤは不機嫌な表情を浮かべる。

「どうしてそんなことを聞くの……？」

「君と士郎に何があったかは俺は知らない。だが、君みたいな小さな女の子がそんな事を考えてはダメだ！」

遊星はイリヤを止めようとするが、イリヤは体をフルフルと震わせていた。

「……うるさい」

「イリヤ？」

「うるさいうるさいうるさい！！　何も知らないくせに、大切な物を失った悲しみを知らないあなたなんかに私の気持ちなんてわかんないのよ！！！　バーサーカー！！！！」

イリヤは心に秘めた憤怒を爆発させてバーサーカーに託した。

「■■■■■■■ーーー！！」

バーサーカーは遊星に向かって突撃する。

「しまっ――」

デュエルディスクでモンスターを呼ぶ時間が全くなく、何も出来ずに遊星はバーサーカーの体当たりをまともに喰らった。

遊星は後ろに吹っ飛び、壁に激突した。

激突した壁は崩れ、遊星は瓦礫に埋まってしまった。

「「遊星！！」」

「マスター、下がってください！」

セイバーは鎧を隠すために着ていた雨合羽を脱ぎ捨て、不可視の剣でバーサーカーに切りかかる。

しかし、不可視の剣はバーサーカーの肉体に当たっても鈍い音を鳴らして弾かれるだけだった。

バーサーカーは持っていた大剣でセイバーに切りかかる。

セイバーは不可視の剣で何とか防いだが、力負けしてしまい、後ろに押されてしまう。

一方、凜は遊星を助けるために瓦礫を退かす。

「遊星！　大丈夫！？　しっかりしなさい！！」

遊星は意識を失っており、肋骨などの骨が何本も折れて口から血が流れていた。

「ぐぁあああっ！！」

「セイバー！！」

セイバーも遊星と同じようにバーサーカーにぶっ飛ばされて壁に激突し、士郎の声が響く。

士郎はセイバーの元に行き、倒れている体を起こす。

「大丈夫か！？　セイバー！」

「マスター、下がってください……私は戦います……」

セイバーはまだバーサーカーと戦おうとする。

「もう止めろ！　このままじゃ、本当に死んじゃうぞ！」

「マスター……サーヴァントである私の最も優先すべき事はマスターであるあなたを護ることです。いかなる敵が現れようとも、私は必ずマスターを護ります！！」

セイバーは力を振り絞って立ち上がる。

「無駄だよ。いくらあなたが頑張っても私のバーサーカーには勝てないわ」

イリヤは嬉しそうに笑いながら言う。

「誰も私のバーサーカーには勝てないわ。バーサーカーの真名はヘラクレス。古代ギリシャ最大の英雄よ！」

「ヘラクレスですって！？」

凛はバーサーカーの真名に驚愕する。

「サーヴァントは人々の知名度に強く影響するの。この世に広く知れ渡った英雄ほど、そのサーヴァントは強力になる。だから……へ

ラクレスに勝てるものなんていないのよ！」

バーサーカーは無傷で力も健在、対する二人のサーヴァントである遊星は倒れ、セイバーはボロボロ。

凛と士郎は絶望的な状況に追い込まれる。

「勝て、ない……もうダメよ……」

凛は完全に諦めかける。

「バーサーカー、先にリンとユウセイを殺っちゃって！！」

「■■■■ーーー！！！」

イリヤは先にバーサーカーで遊星と凛を殺しにかかる。

「遠坂ぁ！！」

士郎は叫び、凛は遊星を抱きしめて死を覚悟した。

その時、遊星の体がピクッと動いた。

「はっ！？」

遊星は目を覚まして意識が覚醒し、デュエルディスクを呼び出してデッキからカードをドローし、その内の一枚を墓地に送る。

「『速攻のかかし』！！」

背中にブースターが付いたかかしが現れ、バーサーカーに突撃する。

バーサーカーに突撃した速攻のかかしは爆発し、バーサーカーを後ろに大きく吹き飛ばした。

「危なかった……」

遊星は安堵のため息をつく。

「遊星……？」

「すまない、凜。もう少しで約束を破るところだった」

遊星は体に走る激しい痛みをこらえて凜の頭を撫でる。

「約束？　約束って？」

「朝に約束しただろ？　命をかけて凜を守るって」

「あ……」

「だから、俺は凜を必ず守る！！」

遊星は立ち上がり、デュエルディスクを構える。

「イリヤ、俺は君を止めてみせる！　そして、凜を守るために俺は戦う！！」

「じゃあ、やってみてよ。わたしのバーサーカーに勝てるものならね！」

「なら、見せてやる。俺のデッキ最凶のシンクロモンスターを！俺のターン！！」

遊星はデッキからカードをドローする。

「俺はジャンク・シンクロンを召喚！　そして、自分フィールドにジャンクと名の付いたモンスターが居るとき、手札から『ジャンク・サーバント』を特殊召喚！！」

ジャンク・シンクロンと共にくず鉄で造られた機械の戦士が現れる。

「ジャンク・サーバント……」

凜はその名前を呟いた。

「レベル４のジャンク・サーバントにレベル３のジャンク・シンクロンをチューニング！！」

ジャンク・シンクロンは腰のレバーを引いて三つの星から輪となり、ジャンク・サーバントが中に入る。

「集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿し、恐怖の力を呼び覚ます。光さす道となれ！」

ジャンク・サーバントは四つの星となり、光の柱が現れる。

「シンクロ召喚！　吠えろ、『ジャンク・バーサーカー』！！」

光の柱から現れたのは、イリヤのバーサーカーにも劣らない強靱な肉体を真紅の鎧を身に包み、斧とモーニングスターが一つになった凶悪な武器を肩に担いだ巨人だった。

「え……ええええっ！？」

「バーサーカーと同じ狂戦士……？」

凜とイリヤは目の前に現れたジャンク・バーサーカーに驚きを隠せなかった。

イリヤのバーサーカーとは雰囲気が全く違うが、それでも巨大な体に他を威圧するような恐ろしい空気を放つ所はまさしく『狂戦士（バーサーカー）』と名乗るのに相応しかった。

遊星はジャンク・バーサーカーの特殊能力を発動させる。

「ジャンク・バーサーカーの効果、墓地のジャンクモンスターを除外して相手一体の攻撃力を減少させる。俺はジャンク・サーバントを選択！　『ジャンク・パワー・ドロップ』！」

バーサーカーの体から力が抜けていき、強靱な肉体を持つバーサーカーが膝を地面に付いてしまう。

「バ、バーサーカー！？」

「ジャンク・バーサーカーでバーサーカーを攻撃！！」

遊星の命を受けたジャンク・バーサーカーの目が真紅に輝き、バーサーカーに突撃する。

「バーサーカー！　やっちゃえー！！」

対するイリヤの命を受けたバーサーカーは立ち上がり、ジャンク・バーサーカーを迎え撃つ。

「■■■■■■■ーーーーーーー！！！！」

バーサーカーはジャンク・バーサーカーを大剣で真っ二つに切ろうとするが、バーサーカーの大剣をジャンク・バーサーカーは武器を持っていない片手で軽々と受け止める。

「バーサーカーの攻撃を簡単に受け止めた！？」

「今だ、バーサーカー・ブレイク！！」

ジャンク・バーサーカーは右手に持つ武器『バーサーカー・アックス』を逆に持ち替え、モーニングスターの方でバーサーカーの胸を強打する。

モーニングスターとは鉄球に棘が突き出たものなので、ただの打撃だけで済むわけが無く、棘がバーサーカーの体に突き刺さる。

そして、バーサーカー・アックスの斧の方に持ち替え、大きく振り上げた。

「うぉおおおおおおおおおおおおおっ！！！」

《――――――――――――――――――――――――！！！！》

遊星の叫び声に共鳴し、ジャンク・バーサーカーも声にならない叫び声を上げてバーサーカー・アックスを片手持ちから両手持ちにして一気に振り下ろす。

バーサーカーは左肩から斜めに肉を切り裂かれ、切り口から大量の血が流れだして倒れた。

そして、呆然としていた凜は呟いた。

「バーサーカーを倒しちゃった……」

最凶のサーヴァント、バーサーカーを倒したことに信じられない表情を見せる凜。

そして、ジャンク・ウォリアー、セブン・ソード・ウォリアー、ジャンク・バーサーカーと強力な力を持つシンクロモンスターを操る遊星に凜は畏怖の念を抱いた。

.

第４話　狂戦士対狂戦士（後書き）

どうでしたか？

バーサーカーＶＳジャンク・バーサーカーの対決は？

次回は凜と遊星が衛宮家にお世話になります。

それから、前に何かの雑誌でセイバーが士郎の学校で一緒に授業を受けている話があったので、遊星とセイバーを穂群原学園に転入させてみようかなと考えています。

皆さんはどう思いますか？

第5話　同盟と意味（前書き）

今回、遊星の過去がちょっと凜に知られる話です。

少し加工している部分がありますが。

第5話　同盟と意味

ジャンク・バーサーカーで最凶のサーヴァントであるバーサーカーを倒し、遊星は安心からのため息を付くと、体中に激痛が蘇る。

「がっ、うっ……」

遊星は両腕で体を押さえて痛みに耐える。

しかし、バーサーカーのマスターのイリヤは笑みを浮かべていた。

「やるわね。バーサーカーを一回殺すなんて」

「一回、殺す……？」

遊星が呟くと、倒したはずのバーサーカーが起きあがった。

「「「「なっ！？」」」」

遊星達は絶句し、バーサーカーの傷が完全に治っていた。

「驚いた？　バーサーカーは１２の命を持っているんだよ。これがバーサーカーの宝具『コッド・ハンド』よ」

「そんな……」

イリヤの自慢に凜たちは再び絶望するが、遊星は激痛を耐えてデュエルディスクを構える。

すると、イリヤはバーサーカーの肩に乗って遊星を見る。
「今日はこれで終わりよ。楽しかったわ、ユウセイ。バーサーカーも気に入ったみたいだしね」
バーサーカーは鋭く凶悪な眼で遊星を睨みつけるが、遊星は強い意志を秘めた眼で睨み返した。
「それじゃあね、お休みなさい。ユウセイ、リン。それから……」
イリヤは先程と同じ雪のような冷たい瞳をしてシロウとセイバーを見る。
「お兄ちゃん、セイバー。またね」
そう言い残すと、イリヤはバーサーカーを連れて立ち去った。
危機が去った一同は安堵のため息をつくが、遊星は心身ともに限界を迎えて倒れてしまう。
「遊星！！」
凛が叫ぶと、実体化しているジャンク・バーサーカーが遊星を受け止める。
そして、ジャンク・バーサーカーは意識を失っている遊星を凛に託すと口を開いた。
《俺達の……マスターを……頼む……》

「えっ？」

凜が驚いた直後、遊星の左腕からデュエルディスクが消え、同時にジャンク・バーサーカーも消滅する。

その後、遊星を急いで衛宮家に運び、凜の魔術で遊星が受けた怪我を治した。

そして、今回マスターとして何も出来なかった凜は眠っている遊星の隣で看病をし、やがて疲れから眠りに落ちた……。

凜は不思議な夢を見た。

茶髪の優しそうな容貌をした綺麗な女性が赤ん坊を抱きしめて涙を流していた。

「ごめんなさい、遊ちゃん……」

そして、誰かに似ている不思議な髪型をした男性がその赤ん坊を受け取り、機械のカプセルに入れた。

「すまない、こんな形で別れることになった。頼む、私達の分まで

生きてくれ。そして……」

男性も一筋の涙を流し、願いを込めながら何かのボタンを押す。

「私が名付けたその名前のように、人と人の絆を繋げる人間になってくれ……『遊星』」

赤ん坊が入ったカプセルはどこかに射出され、次の瞬間、男性と女性は白い光に包まれた。

そこで夢が終わる。

不思議な夢を見た凜は目覚め、布団に横たわっている遊星に視線を移す。

眠っている遊星の目尻から涙が流れ、凜は指ですくい取った。

「今のは……遊星。あなたの夢なのね……」

凜は額に手を当てて考える。

「マスターとサーヴァントは霊的に繋がっているから、こういう事

はあると思ったけど……」

（遊星が赤ん坊の時に、遊星のお父様とお母様は既に……一体、何があったのかしら……）

だが、それを聞くのは、遊星の心の傷をえぐるようなものだと凜は思い、遊星が自分から話してくれるまでは絶対に聞かないと心に誓った。

すると、遊星の体が僅かに動き、ゆっくりまぶたを開けて目を覚ました。

「あっ、遊星。気分はどう？」

「凜……ああ、大丈夫だ」

遊星はゆっくり起き上がり、凜を見る。

「もしかして……看病してくれていたのか？」

凜の疲れている表情を見て遊星はすぐに気付いた。

「そ、そうよ。ほら、起きたのなら早く衛宮君たちの所に行くわよ！」

「ああ」

遊星は頷き、士郎が着せた着物の寝間着を脱ぐ。

「ちょっ！？　いきなり何で脱ぐのよ！？」

「あ、すまない。着替えようとしたんだが、まだ頭がぼーっとしてしまった……」

「全く、もう……」

凜は遊星の鍛えられた上半身の裸を見てドキドキしている。

すると、遊星の右腕に刻まれた不思議なモノが目に入る。

「遊星、右腕のそれは何かしら？」

「これか？」

遊星は右腕を凜に見せる。

それは赤い線で刻まれた竜の頭の形をした紋様だった。

「竜の紋様……遊星、これは何？」

見たことのない紋様に凜は問う。

「これは、赤き竜の紋章の一つ、ドラゴンヘッドの痣だ」

「赤き竜……？　何よそれは？　聞いたことがないわ」

「そう言えば話してなかったな……凜、この話は士郎とセイバーと一緒の時に話す」

「わかったわ。じゃあ、早く着替えて居間に来てちょうだい」

「ああ」

凜は部屋を出て先に居間に行き、遊星は私服に着替えると少し遅れて居間についた。

「遊星、もう起きて大丈夫なのか？」

「心配しましたよ、ユウセイ」

「ありがとう、士郎、セイバー」

遊星は礼を言うと畳の上に座る。

「あ、遊星。言い忘れていたけど、私と衛宮君は同盟を組むことになったから」

「同盟？」

「本来なら私と衛宮君は敵同士だけど、イリヤは個人的に衛宮君を狙っているし、そのサーヴァントのバーサーカーが遊星を気に入ってしまったから必然的に私達の共通の敵になる。ここは協力してバーサーカーを倒すって事にしたのよ」

「そうか……凜がそう言うなら俺はそれに従う」

「うん。じゃあ、さっきの赤き竜について教えてくれる？」

「ああ」

遊星は赤き竜の痣を見せながら凜たちに説明する。

「赤き竜は星の民と呼ばれる古代の民族の王、星竜王が邪悪な戦乱を治めるために祈りを捧げて現れた神の化身だ。そして、その赤き竜に選ばれてこの痣を受け継いだ戦士が『シグナー』だ」

「星の民……神の化身……遊星、あんたって要するに神に選ばれた戦士ってこと！？」

凜は遊星の説明に驚きを隠すことが出来なかった。

そして、少なくとも今の説明で遊星は相当な力を持った英雄だと凜は推測する。

話を聞き終えると、遊星と凜は一度遠坂家に戻る。

凜は大きな鞄に服や日用品を詰めて荷造りをしながら遊星の事を考える。

（遊星って……考えてみれば凄い奴よね。神様に選ばれた戦士で、世界を救った英雄。あのバーサーカーに臆すること無い不屈の精神を持ち合わせてるし。しかも、機械にも精通しているし……少なくとも、過去で名を馳せた英雄達とは大違いね）

凜の想像している英雄とは少し違う異世界の英雄である遊星。

そして、なぜそのような英雄が自分が召喚出来たのか凜は疑問を抱く。

（何か……意味があるのかもしれないわね。遊星が私に召喚された

ことに……この聖杯戦争を勝ち続ければ、きっと！）

それが何なのかは今の凛には検討がつかないが、聖杯戦争を勝ち続ければ何かが分かるかもしれないと凛は自分の中で結論づけ、荷造りを完了させる。

荷造りを完了させると、凛は荷物を遊星に持たせて再び衛宮家に訪れる。

「と言うわけで、今日からここでお世話になるからよろしくね、衛宮君♪」

凛は笑みを浮かべて士郎に言う。

「……なんでさ？」

「私達は戦略上、常に行動を共にする必要があるのよ。あっ、私はどこで寝ればいいの？」

「ああ……離れがあるからそこの部屋を……って、ちょっと待て、遠坂！！」

凜はズカズカと遠慮なしに離れの部屋に入ると遊星が運んできた荷物を置く。

「遠坂は女の子だからこう言うのはマズいんじゃ……」

士郎の言うことは最もであるが、凜は厳しい表情をしてビシッと士郎を指さす。

「衛宮君、あなたも魔術師の端くれなら覚悟を決めなさい！！」

「ゆ、遊星～！」

士郎は遊星に助けを頼むが、遊星はヤレヤレと言った様子で首を横に振る。

「無理だ、士郎。気持ちは分かるが、今回は凜に従うしかない」

「その通りよ。さすがは遊星♪　それから、あんたも空いている部屋を使えば？」

「ああ。すまない、士郎。これから世話になるぜ」

「はい……もう好きにしてください……」

士郎はガクッとうなだれながら凜の言う覚悟を決めるしかなかったのだった。

第5話　同盟と意味（後書き）

桜ちゃんと大河師匠は次回登場予定です。

やっと私が一番大好きなＦａｔｅキャラの桜ちゃんを出せる……。

そして、遊星とセイバーが穂群原学園に転入！？

お楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9647x/

Fate5D's

2011年11月10日15時06分発行